

文屋（六歌仙容彩）

へ鳥帽子きた鷹の羽おとしきよろ／＼と 小鳥めがけて一のし
にその人柄も康秀が 裳裾にじゃれる猫の恋

へ届かぬ乍らねらいきて 行くをやらじとコレ待った 仇憎らし
いなんじやいな お清所の暗まぎれ 晩にやいのと耳に口 へむ
べ山風の嵐ほど どつと身にしむ嬉しさも 秋の草木かしお／＼
と 一人寝よとは男づら 鮑の貝の片便り 情ないではあるまい
か へ寄るを へつきのけコリヤどうぢゃ

へ鼻の障子へたまさかに ねぶかの香るあだつきは 時候違いの
河豚汁で 一人ばかりか盛かえを 強いつけられぬ御馳走はそ
も／＼おじぎは仕らぬ これを思えば少将が九十九夜／＼思
つめ 傘をかたげて丸木橋や おつとあぶねエすでの事 鼻緒は
切れて片足は ちんがちが／＼オ、つめた

へその通路も君故に 衣は泥にあかつきのすご／＼かえる憂き
思いならぬ乍らも我恋は 末摘花の名代を つき付けられて恥
かしい 地下の女子の口ぐせに

へ田町は昔今戸橋 法印さんのお守りも 寝かして猪牙に柏餅
夢を流して隅田川 へ男除けならそつちからほ、は高間が原の
上（逢えばいつもの口車） 乗せる手ごとはお断り 逃げんとす
るを恋知らず 引留むるのを振払い イヤ／＼／＼ へ逢う恋
へ待つ恋 へ忍ぶ恋 へかごはシテこい へ萌黄のかや呼んでこ
い

へぎつちり詰ったやにぎせる えくぼのいきのうくばかり これ
じゃゆかぬと康秀が

へ富士や浅間の煙はおろか 衛士の焚く火は沢辺の螢 やくや藻
汐で身をこがす そうじゃえ へ合縁奇縁は味なもの 片時忘る
ゝひまもなく 一切からだもやるきになつたわいな そうかいな
へ花に嵐の色の邪魔 寄るをこなたへ遣戸口 中殿さしてぞ走り
行く